

第3分科会

地域のセンター的役割

第3分科会：地域のセンター的役割

提言者：北九州市立門司総合特別支援学校

居原 孝侍

テーマ「病弱特別支援学校へのスムーズな移行支援について」

提言者：沖縄県立森川特別支援学校

前上里 博子

テーマ「センター的役割の充実を目指して」

～本校と院内学級における取り組みから～

病弱特別支援学校へのスムーズな移行支援について

北九州市立門司総合特別支援学校

居原 孝侍

1. はじめに

本校は、知的障害教育部門と病弱教育部門の複数障害部門を設置する総合特別支援学校として開校し、今年度で4年目になる。病弱教育部門は、寄宿舎のある門司特別支援学校と通学制の企救特別支援学校の二校を再編統合して創設された。寄宿舎のある門司特別支援（養護）学校は、「心身症等による不登校、軽度の慢性疾患等の状態で、居住地の学校に通えない児童生徒が、通常の学校と同じ学習をしながら、寄宿舎生活を行い心身ともに健康を取り戻す」ことを目標に、海と山に近い風光明媚な新門司に日本で初めての病弱の学校として小中学生を対象に昭和22年に開校した。一方、企救特別支援（養護）学校は昭和49年4月に通学制の養護学校として開校され、翌年には高等部も設置された。再編統合にあたっては、企救特別支援学校の小中学部の対象児童生徒を慢性疾患系と心身症系に分け、慢性疾患系の児童生徒を同時に開校した小倉総合特別支援学校の病弱教育部門へ43名（小18名、中9名、高16名）転学し、心身症系の児童生徒は本校の病弱教育部門に22名（小5名、中17名）転学した。

本校の病弱教育部門の就学エリアは北九州市全域だが、スクールバスが市内の東半分域しか網羅していないので、遠方からくる場合は保護者が送迎している。今年度は、知的部門の小学部56名、中学部31名、高等部84名の計171名に対し、病弱部門は小学部4名、中学部12名の計16名である。生活や学習する棟は知的障害教育部門と病弱教育部門とは分かれており、日常的な学習活動でも交わることはない。児童生徒16名に対し教員は11名だが、中学部担当は7名のため臨時免許を取得して何とか教科制を維持している。

2. 本校の病弱教育部門のようす

開校時は門司特別支援学校から2名、企救特別支援学校からは14名、他校から6名が転学してきたが、いくつかの点で共通した特徴があった。

一つ目は、疾患名としては、心身症、自律神経失調症、適応障害、選択制場面緘黙、気管支喘息、てんかん、睡眠障害、過食症、心気症、過換気症候群、神経症、過敏性腸炎、チック症などが医療機関から診断されていたが、ほとんどの児童生徒が「自閉症スペクトラム障害」や「ADHD」「学習障害」といった発達障害の診断名がつけられていた。

二つ目は、3名を除いた児童生徒が、短くて半年、長くて3～4年の不登校を経験していた。不登校のきっかけは、友人からのいじめや担任の言動、他人の目が怖くて教室に入れない、集団生活が苦手、勉強に意味を見出せない…等々さまざまな理由があり、登校しぶりから不登校状態に陥っていた。言葉が出なくなったり、立てなくなったり、「死にたい」といった希死念慮のため入院生活を経験した者も4名いた。このため、年度途中や新年度からの転入が16名中の15名だった。精神の手帳も1級取得者が1名、2級取得者が2名いた。

三つ目に、どの保護者も子どもたちの子育てや対応の難しさを抱いており、悩み、迷う保護者への支援も必須だった。

四つ目に、病弱教育部門へ転入してくる児童生徒の多くは、学校生活に自信をなくしており、友達や先生たちの視線や言動に不安や恐れを感じていた。転入してきてもいきなりフルタイムで学校生活を送ることはできず、スクールバスにも乗ることができない児童生徒がほとんどだった。授業も不登校のため、学習空白

があり、本来の学年に準ずる課程の教育ができず下学年の学習から始めなければならない児童生徒がほとんどである。中には小学校低学年から学校に行けなくなり中学部から学校に来るようになったが、学習規律が身に付いておらず、学校生活に慣れることから始めないといけない生徒もいる。

こうしたことから、転入時に児童生徒の不安や心配を軽減し、安定した新しい学校生活をスタートさせるためには、どのように学校生活を移行させるかは、大きな課題の一つだった。また、同じような不安や心配は、送り出す側の学校や担任も同様で、「同じような失敗を繰り返させたくない」との思いを強く感じる。

本校が病弱教育のセンター的機能としての役割の一つとして、病弱教育部門に入学もしくは転入してくる児童生徒や保護者を支えながらどのように取り組んでいるかを報告する。

3. 移行支援

【学校見学】

本校では、学校見学時での児童生徒の行動観察や保護者からの聞き取りを大事にしている。見学の依頼は、現籍校の校長から本校の校長への連絡から始まるのだが、保護者や担任から直接連絡してくることもある。

学校見学の流れ (例)	
1.	校内見学 (授業や環境)
2.	病弱部門の概要
3.	保護者からの聞き取り
4.	質疑

個別の学校見学の対応は本校では主にコーディネーターらが複数で対応している。学校見学は、授業の様子や教室等の施設環境を見てもらう。その際、児童生徒の言動や保護者との関係も注意深く観察する。挨拶はできるか、視線を合わせて聞いたり応答できたりするか、物音や人影に対してどんな対応をするのか、好きな勉強や遊びなどを質問したり、プレイルーム等の遊具と一緒に遊んでみたりする。その後、相談室に入り、資料を使って病弱部門の概要について説明をする。

学校見学時に一番大事にしているのは、保護者からの聞き取りである。初めは保護者が困っていることを聞きながら、以下のようなことを聞き出していく。

- ・子育てをしながら気になったエピソード
- ・定期健診等で指摘されたこと
- ・医療歴や病院にかかった時の診断名や服薬の有無
- ・受診している療育機関やその内容
- ・家族や保育士や担任から言われたこと
- ・子どもの特性や得意なこと、苦手なこと
- ・コミュニケーション力や友人関係
- ・情緒が不安定になった時の様子
- ・放課後デイサービスなどの福祉サービスの利用
- ・登校方法の確認 (スクールバスの利用希望や乗降場所の確認)
- ・手帳やアレルギーの有無
- ・家族構成や保護者が相談している支援機関

最後に本校を希望する理由などを聞く。学校見学ではよほ

どの事情がない限り、本人にも来てもらうが、聞き取り場面では保護者が子どもに気を使うことなく話

201 (平成)年 月 日 () : ~ : 記録:					
NO. 学校見学の記録					
表校者:	記録:				
ふりがな 児童生徒 氏名 登録校 ふりがな 保護者 氏名	性別 (男・女) 住所 (〒 -) 学校 年 (担任:) 連絡 (自宅) (の携帯) 先 (の携帯) これまでの経歴 (療育歴・教育歴)				
<table border="1"> <tr> <td>身体状況 (視力・聴力・身体等)</td> <td>情緒・行動・コミュニケーション</td> </tr> <tr> <td>医療歴・連携機関</td> <td>就学に関して ○就学相談 (演・無・予定) ○通学手段や時間 ○手帳の保持</td> </tr> </table>		身体状況 (視力・聴力・身体等)	情緒・行動・コミュニケーション	医療歴・連携機関	就学に関して ○就学相談 (演・無・予定) ○通学手段や時間 ○手帳の保持
身体状況 (視力・聴力・身体等)	情緒・行動・コミュニケーション				
医療歴・連携機関	就学に関して ○就学相談 (演・無・予定) ○通学手段や時間 ○手帳の保持				

してもらえように、本人を保護者から離して、図書室や別室で過ごしてもらおう。ほとんどのケースで見学に来校する時点で、児童生徒は学校生活に不適応を起こし、不登校状態になっており、保護者は時には感情的になりながら、これまでの経過について語ってくれる。こうした情報は本校への就学が決まった際の重要な資料となる。

【体験学習の計画】

就学相談会を経て病弱部門への就学が内定されると、体験学習を計画する。学校見学だけで本校への就学を決めてしまうと、いざ就学してみるとこんなはずじゃなかったと、再び不登校状態になる児童生徒もいるため、前身の企救特別支援学校から行って来た。体験学習は、現籍校の校長がスムーズな転校のためには必要だと認めた場合、本校の校長に申し入れる形をとっている。担任には負担になるが、本校としてもスムーズな転校のためには欠かせなくなっている。ねらいは、三つある。

- ・本校に登校してくることに慣れる
- ・担任や本校職員とのラポート関係を築く
- ・児童生徒への適切な手立てや支援方法を探る

体験学習の期間や内容については、本人も交えて保護者と計画を立てるが、最近ではスクールバスの体験試乗も行うようになった。

体験学習を行うと同時に保護者の了解を取ったうえで、療育や医療機関や福祉サービスの事業所などから聞き取りをしたり、少しでも学校などに登校しているのであれば、登校時間に合わせて学校生活や学習の様子を見に行かせてもらったりしている。

【体験学習】

体験学習の期間は、児童生徒の状況に合わせて違っている。短くて2日間、長くて3週間行った例もあるが3～4日間が多い。はじめは1～2時間登校から始め、徐々に在校時間を延ばし、その間スクールバスの試乗や給食の体験も入れている。時間があれば発達検査（主にWISC-IV）も行っている。体験学習の様子は担任が以下の観点から様子を記録に起こしている。

- ・教師の指示に従って行動することができるか
- ・学習態勢はどうか
- ・どんなこだわりや行動などの特性があるか
- ・周りの子どもたちとコミュニケーションがとれるか
- ・給食時の様子
- ・集団に入ることができるか
- ・集団学習での様子
- ・学校生活への意欲や関心はどうか

【体験学習後の振り返り】

体験学習の最後の日には校長面談を設け、体験学習の感想を聞いたり、本校への就学の意志を保護者共々確認する。その後、校内就学検討委員会を開き、教育委員会の就学相談担当指導主事にも参加して、担任の記録をもとに体験学習の様子を振り返り、成果や課題を整理する。その後、本人と保護者に来校してもらい、体験学習の様子を振り返り、最終的な就学の意志を確認する。そして、正式な就学措置となる。

4. 事例「小学部6年生A子の場合」

今年度の4月から小学部6年に転校してきたA子は小学4年の2学期から学校に行けなくなったため在籍校から本校を紹介され、小4の11月中旬に父親だけが学校見学に来校した。

○学校見学時の情報

(学校見学の記録から一部抜粋)

- ・保育所時代は、服を切られて帰ってきたことがあった。人見知りは激しい方だった。
- ・小学校に入学後、ぜんそくで入院することがあった。夏休み明けよりぜんそくなどで休みがちになった。きっかけは不明だが、10月から学校に行けなくなった。クラスに仲の良い子がいないという。別のクラスでは遊べる子もいるという。最近は朝起きて学校に行く用意をするがいざとなると泣いて学校に行けない。寝るのが遅く、寝つきも悪く、今朝は一度起きたが、体がきついと言って同行できず。昼間は犬と遊んでいる。本人は文系が得意。
- ・ぜんそくの病院のほか、心身症のことで小児科に相談に行っている。
- ・家族は両親と本人の3人。

「転校するにはどうしたらよいか」と聞かれたが、本人が見学をしていないので、「本人に見学してもらってから考えたらどうだろう」と返事をした。

それから2ヶ月後の1月中旬に、両親と3人で見学に来た。見学中はずっと母親の手を握っていた。何度か問いかけたが、微笑み返すが言葉で返事をするのではなく、首を振って応えた。スクールバスの利用希望があったが、バスは満席状態で乗れないかもしれないことを伝えると母親は、「私は精神疾患があり、車が運転できない…その時は私が付いてJRで送るしかないが…」と心配していた。見学中、父親はほとんど口をきかなかった。就学相談願を出すかどうかは、学校と相談してから決めると言っていた。対象のバスには始発(7:35)から乗り学校につくまで1時間以上乗らないといけないこと、また乗り物には一人で乗ったことがないというので、本校よりもっと自宅寄りにある慢性疾患対応の小倉総合特別支援学校にも見学に行かれたらどうかと伝えた。

小5になり9月に小倉総合特別支援学校の見学をしたが、本人が「門司だったら行ける」というので3回目の学校見学を小5の1月中旬に行った。母親は体調がよくないということで、父親と在籍校の校長が同行して来校した。

(学校見学の記録から一部抜粋)

- ・1年前に会った時より父子とも太っていた。A子は1年前より人見知りがひどくなったようで、話しかけても無表情になついたり首を傾げたりするのみであった。
- ・学校の様子を覚えているかと聞くと、首を振った。初めに学部の説明をし、その後学校見学をした。ずっと父子は手をつないでいた。見学の最後にスクールバスに案内し彼女の座席となるであろう一番後ろの席に座らせた。嫌がるでもなく淡々としていた。
- ・昨年9月に小倉総合の見学に行った。男子が3人ほどで騒がしかったので、通えるかどうか心配だと本人は言っていた、という。
- ・小4の夏以降学校に行っていない。家では主にTVを見たりゲームをしたりしている。家で犬を飼っているので犬の世話をしている。
- ・昼夜逆転の生活をすることもあるが、昨日は父親が9時過ぎに帰宅するともう寝ていた。今朝は7時30分に起こした。
- ・喘息のため近くの内科に薬をもらいに行っているだけで、特に病院には通っていない。
- ・不登校のきっかけは小4の時の友人からのいじめかららしい。母親は何度か学校には伝えていたという。

見学後、在籍学校の校長や保護者からも体験学習の申し込みがあった。

○体験学習

1月下旬に再び父親に來校してもらい、体験学習の計画を立てた。体験学習のねらいを伝え、実施日を4日間設定した。

- ・2月13日(水) …父親の送迎で1～2校時
- ・2月18日(月) …(12時過ぎに父親と登校) 給食～6校時まで→下校時はスクールバス
- ・2月22日(金) …スクールバスで登校～2校時まで→父親の迎え
- ・2月27日(水) …スクールバスで登校～検査(WISC-IV)～給食～6校時→下校時はスクールバス

○体験学習の記録から

体験学習中の記録は次のような観点と記号で整理していった。

指示に従って行動することや学習態勢について	=====
学習状況について	-----下線-----
こだわりや行動の特性について	白黒反転
コミュニケーションについて	//////
集団参加について	~~~~~下線~~~~~
学校生活に対する意欲や関心	□

(記録から一部抜粋)

- ・こちらが説明している時は、基本的に静かに聞いていた。質問に対しては頷く等の応答はあったが、目線はあまり合わなかった。
- ・ノート最後の目付は10月中旬だった。字はとても丁寧で、色鉛筆を使い分けたり、定規で線を引いたりして整っていた。4年下の教科書の最初の単元の「面積」は学習していた。
- ・“明日、誕生日なんだね。おめでとう。”と声かけすると、全く嬉しそうな表情はせず、慌ててそのページを隠そうとしていた。**自分のことをあまり人に知られたくない様子だった。**
- ・**スクールバスの中ではほぼフードを被ったまま。**
- ・初めて来た日よりも声は少し大きくなり、やや離れていても聞き取れる大きさになっていた。少し慣れた様子。
- ・給食はすべてきれいに食べ、友達の話を聞いて時折、そっと笑っていた。

心配されていたスクールバスの試乗は、バスに乗るとすぐにフードを頭からかぶり、うつむいたまま1時間以上過ごしていた。時折窓の風景を見て場所を確認しているようだった。

○体験学習の振り返り

校長面談では、「学校は慣れてきた?」「この学校でやっていけそうですか?」と尋ねても首を縦にうなずくのみだったが、保護者も本校の就学を希望していることが確認された。1週間後、就学担当の指導主事も交え、父子とともに体験学習の振り返りを行った。

○登下校について

- ・決められた時間に登下校できた。スクールバスにも乗ることができた。
- ・初日は戸惑いが見られたが、父と離れても不安そうな様子は見られなかった。

○指示に従っての行動や学習態勢について

- ・時間に合わせて行動できる。
 - ・教師の指示に従うことができる。学習準備もきちんとできる。
- 学習にも真面目に取り組む。

・首の傾きか横振りで「はい」か「いいえ」の意思表示をしていた。
答えにくい時は、首を傾げる。「どうだった?」「どうする?」等の質問に答えるのは苦手な様子だった。

○こだわりや行動の特性について

- ・初めての場所や人には戸惑いがある。慣れるとよくなる。
- ・トイレは、声をかけ一緒に行くことで、入れるようになった。
- ・自分のことをあまり人に知られたくない様子が見られた。
- ・記録する時、線が曲がるなどが許せない様子。ノートはきれいに書く。
- ・絵も少し曲がったりすると、何度も消しゴムで消して描き直していた。
- ・手先が器用。絵を描くのも上手。
- ・字の形にこだわりがある様子。答えが合っても、消しては書き直すことがあった。

○コミュニケーションについて

- ・初めは「はい」か「いいえ」を答えるのみだったが、日を追うごとに単語で返答できるようになってきた。
- ・聞かれたことに対しては、真摯に答えようとする。
- ・できないことやしたくないことは首を振り、意志を告げることができた。
- ・表情の変化が、ほとんどなかった。快・不快を表情で読み取ることが難しい。最終日は笑顔が少し見られた。

○給食も含めて集団参加について

- ・給食準備や後片付けなど、良い習慣が身に付いている。
- ・当番活動もできる。

○学校生活に対する意欲や関心

- ・表情は、笑顔を見せることもなく、特に変化はないが「楽しかった。」と答えた。
- ・学習意欲もあり、真面目。プリントも黙々と取り組み、自分で進めていくことができる。

振り返りの最後に、就学担当の主事から、「体験学習はゴールではなく、新たなスタートである。子どもが楽しく登校できるように学校と協力しながら、家庭でも環境づくりをしてもらいたい」と声をかけてもらい本校への正式な就学が決まった。

5. 成果と課題

○A子は今年度の4月から小学部6年生に転入した。学校に行っていない期間が長かったので1日数時間の登校から始めてはどうかと提案したが、「(親の)送迎ができないのでスクールバスで登校させたい」と毎日乗ってくるようになった。体験学習中に試乗していたおかげで、ほとんど休むことも遅刻することもなく登校できている。

○また、今年度大幅な移動があり、小学部の職員が全員今年度転入してきた職員になったが、学校見学から体験学習までの記録や検査結果(WISC-IV)も確認してもらった。転入前にA子のプロフィールが分かり、支援方法が絞れたことも職員にとってメリットがあったと考える。

●学校見学から体験学習を経て就学までの一連の計画は主にコーディネーターが計画し行ってきたが、体験学習の記録やスクールバスの試乗の同行等、小学部の担任の協力に負うところが大きい。日常の業務に加えての取り組みのため、なるべく担任に負担がいかない方法を検討したい。

●本校の小学部は現在、児童4人に対し担任3人で対応している。全員が1年～2年の学習空白期間があるため、準ずる教育課程とはいえ、該当学年の学習がすぐにできるわけではない。学習空白を埋めながらの学習のため、様々な工夫が必要になっている。

第3分科会

「センター的役割の充実を目指して」 ～本校と院内学級における取り組みから～

森川特別支援学校センター的役割班
教諭 前上里 博子

1 はじめに

沖縄県立森川特別支援学校は、県内唯一の病弱教育に特化した特別支援学校で、「通学生を対象としている本校」と「県内8つの病院に入院している児童生徒の学習保障を行う病院内訪問学級（以下、院内学級）」に分かれている。本校には小学部から高等部までの児童生徒が在籍しており、院内学級では拠点となる2病院において小学部・中学部・高等部、そしてその他6病院で小学部・中学部の児童生徒を受け入れている。院内学級は入院期間中の在籍となるが、退院するまでに原籍校（入院前に在籍していた学校）や医療関係者と様々なやりとりを行っており、各機関との連携はとても重要なものとなっている。

今回の研究にあたり、平成29年度に県内小・中学校病弱虚弱特別支援学級（以下、病弱学級）向けにアンケートを実施した。その回答により、各学級での児童生徒の実態や登校状況、担当者の困り事等を知ることができた。さらに、ネットワーク作りや情報共有の必要性も課題として見えてきた。

2 研究の目的

近年、インクルーシブ教育の理解が進み、病弱・虚弱の児童生徒が地域近隣の学校へ通うケースが増えてきている。実際、これまで沖縄県では特別支援学級の設置基準が5人の児童生徒に対して1学級と定められていたが、平成28年度より1人の在籍でも開設できるようになったため、対象児童生徒の受け入れに伴う特別支援学級の設置校は増加している。

特別支援学級の設置により学校が児童生徒・保護者のニーズにきめ細かく応えられるようになったものの、病弱学級数はまだまだ少なく、昨年度実施したアンケート調査によって担当者が様々な悩みを抱えていることがわかった。主なものは、児童生徒の体調への配慮、学習・進路指導、自立活動についてであるが、担当者が校内で他の職員と話題や悩みを共有できず、一人で苦慮している実態が明らかとなっている。

院内学級では、児童生徒の入退院に伴った学籍の異動が短期間で頻繁に行われている。その理由として「医療の進歩による入院期間短縮化」、「一時退院等を繰り返す治療計画」等があげられる。その都度、院内学級担当者は書類の作成、原籍校との連携、転入時・転出時カンファレンス、医療側との連携等の対外的なやりとりを行っている。しかし、諸手続の過程において原籍校と連携が上手く取れず、児童生徒の学習に不利益が生じることも少なくない。

上記のことより、病弱学級担当者や児童生徒が抱える不安や悩みを軽減するため、病弱教育に関する情報提供並びに病弱学級同士の連携を深める場が必要ではないかと考えた。また、院内学級においても、これまで培ってきた病院及び原籍校との連携方法（転入時・転出時カンファレンス、ICT交流等）や協力体制を整理し記録を残すことで、児童生徒が安心して復学できるのではないかと考えた。これらをふまえ、本研究テーマを「センター的役割の充実を目指して」と設定した。

3 研究計画（平成30年度）

月	研修内容(本校)	研修内容(院内学級)
4～5月	年間計画及びテーマ設定	研究体制の確認 内容の検討
	前年度アンケートの見直し	
6～7月	第1回アンケートの実施、集約	研究体制の確認 内容の検討
	前年度アンケート結果を送付	
8月	事例検討会、第1回情報交換会	事例様式の検討、確認、事例入力
	公開研修①	
9～10月	公開研修②・③、校内中間報告会	
11～12月	第2回情報交換会	原稿作成 研究のまとめ
	第2回アンケート実施、集約	
～2月	原稿作成、研究のまとめ	校内研修報告会
	校内研修報告会	

4 研究の実際

(1) 本校

ア アンケート分析（アンケートの内容と結果については別紙資料1・2参照）

(ア) 実施方法

平成29年度実施したアンケートより、各校の児童生徒の実態や担当者の悩みが見えてきた。その結果を詳しく分析するため、平成30年度は小、中学校の病弱学級を中心に7月に1回目のアンケートを実施した。

また、12月にはセンター的役割として行ってきた今年度の活動を振り返るため、2回目のアンケートを実施した。

(イ) 内容

A 病弱学級の児童生徒の様子

小学校では、在籍児童の中に先天性疾患や慢性疾患の割合が多いが、我々の予想に反して全体的に出席率は高いことがわかった。一方中学校では、上記の疾患に加え起立性調節障害等の割合も高くなり、出席率は各学校でバラつきがある。しかし校種にかかわらず、「登校支援と学習指導のバランスが取りづらい」「学習意欲のなさが体調によるものなのか気持ちの問題なのか判断が難しい」という担当者の悩みは共通していた。

学習進度については、欠席等による遅れがあったり下学年代替の学習を行ったりしている児童生徒が3割を占める。学習内容に関しては、教科指導の際、意思疎通の取りづらさや書字の困難さを抱える児童生徒に対して、支援方法を工夫している様子が伺える。また、自立活動では、自己肯定感を高める取り組みや体調・生活リズムを整えることを中心に行っていることが多いことがわかった。

各学校の実態から、今後の情報交換会では「教科指導・自立活動」「運動や休憩、学習のバランス」「保護者や関係機関との連携」等の議題を取り上げて欲しいとの要望があった。

B 校内・校外関係機関との連携

障害を有する児童生徒の情報は、年度初めに職員間で確認する場を設けている学校が多い。また協力学級と病弱学級では、協力学級が作成している週案を共有したり、必要な支援について一緒に話し合ったりしながら連携を取っている学校が多く見られる。(校内連携)

児童生徒の疾患に関しては、担当者が主治医に直接話を聞くことは少なく、保護者から間接的に情報を得ることが多いことがわかった。リハビリ等の情報入手についても同様である。このことは担当者の多忙さも一因だと思われるが、児童生徒の実態把握のアプローチとして医療とつながるといった視点を持っていないのではないかと推測できる。(医療連携)

また、児童デイサービスとの連携については、迎えに来た指導員と情報交換をしている担当者もいるが、4割近くが連携を行っていないという結果が出ている。(福祉連携)

これらのことから、校外の各関係機関との連携について検討する余地があるのがわかる。

C 森川特別支援学校と病弱学級、病弱学級間の連携

情報交換会後にアンケートを送付した際、病弱学級に関する資料や情報も提供した。そのことにより、回答には「同じ悩みを持っている人がいるんだと少し安心した」「近隣に病弱クラスがないのでとても参考になった」という声があった。また、今後参加者を増やすためにWeb会議システムの提案を行ったが、「近場の学校はできるだけ集まって、顔を合せて話し合いや研修を持ったほうが良い」という声もあった。

イ 事例検討会について

病弱教育への理解を深めるべく、8月に外部講師を招き事例検討会を実施した。各担当者の抱える様々な課題に対しての「視点のあり方」と「支援の手立て」を学ぶため、一つの方法としてジェノグラム・エコマップ(ジェノエコ)を活用した「インシデント・プロセス法」を紹介した。

事例検討会の内容

対象	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生 ・体調不良により、3校時から給食までの週3日登校。 ・できないことがあると急激に学習のモチベーションが下がる。
主訴	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ朝から1人で登校し、不安がらずに学習にチャレンジしてほしい。
各グループからの意見	<ul style="list-style-type: none"> ・本人のやりたい事、できるようになりたい事をはっきりさせ、目標を明確化してはどうか。 ・できる事から学習して成功体験を積み重ね、自己肯定感を高める言葉かけをしてはどうか。 ・睡眠の状況等について主治医や家族に聞き、無理のない目標設定をしてはどうか。
外部講師のアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・市町村の相談員を積極的に活用してほしい。医療側は、個人情報開示が難しい場合もある。
事例提供者の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・医療との連携等、考えつかなかった提案があり、収穫があった。

ウ 情報交換会について

情報交換会は、8、9、11月の3回、小学校および特別支援学校(グループA)、中学校(グループB)に分かれて行った。

情報交換会の参加校と内容

参加校	病弱学級…5校、知的障害学級…1校、自閉症情緒学級…1校、特別支援学校…2校(3回実施の延べ参加校数)
内容①	3回全てに参加した学校については、発展的に問題解決に向けて取り組むことができた。(事例1・・・別紙資料3参照)
内容②	<p>話題：複数の児童がいる場合、各々の実態が違い、安全管理が難しい。</p> <p>→ 安全管理は何よりも優先すべきである。ヘルパー等を要請する等、管理者と相談してはどうか。</p>
内容③	<p>話題：医療的ケア児への対応について、保護者は通常学級で過ごさせて欲しいとの希望があるが、他の教師からは児童の実態に応じた指導が必要ではないかとの意見があり担当者としてはジレンマを感じている。</p> <p>→ 禁忌事項を担当医に確認し、それ以外の本人ができることはチャレンジしても良いのではないかと。</p>
内容④	<p>話題：来年度、病弱学級を新設予定なので、様子を知りたい。</p> <p>→ 既にある病弱学級担当者から授業の組み方や、他の特別支援学級、協力学級との連携の仕方などの情報交換を行った。</p>

内容⑤	話題：周りの教師の病気に対する理解が足りず、本人に不利な状況となる場合があり、担当者としてはどのような対応をすればよいか困っている。 → 周りの理解を促すため、主治医同席のケース会議を開くと良いのではないか。
その他	特別支援学校からの参加があり、訪問学級における授業実践の情報交換を行った。

エ 研究の成果と課題

(ア) 成果

A 病弱学級の実態の把握

アンケートの結果から、各校で抱える悩みや困難さ、病気や障害に合わせた対応の仕方等、担当者が試行錯誤しながら教育実践を行っている実態を知ることができた。

B ネットワーク体制作り

事例検討会では、担当者の共通した悩みである登校支援及び学習指導の難しさについて各々が当事者意識を持ち、具体的な支援方法を考えることができた。この会では、他人の意見を否定しないことや発言の際に事例提供者へねぎらいの言葉をかけることを最初に確認したため、温かい雰囲気の中で活発な意見交換ができ、自己肯定感を高める工夫や医療との連携方法等、多岐にわたる実践的な提案があった。いろいろな視点から支援方法を考える手法として校内でも取り入れてみたいという意見もあり、意義のある会となった。

情報交換会では、登校支援や学習指導、保護者や外部機関との連携、進路指導等のテーマについて話し合い、情報の共有を図ることができた。参加者が連絡先を交換し合う場面も見られ、顔を合わせたことで担当者同士がつながる機会をつくることができた。また、Web会議システム「ZOOM」の活用例を紹介することもできた。

後日、公開研修や情報交換会の記録、同時双方向型授業の資料等を各学校に送付した。当日参加ができなかった担当者にも、資料を通して情報提供ができた。

C 研修会実施による専門性の向上

3回の公開研修や事例検討会を実施した結果、多くの参加があり、より良いケース会議の持ち方等を知る機会となった。

(イ) 課題

A 日程や場所の調整

研修会や情報交換会は当校で実施したため、近郊以外の学校からは参加が難しいとの意見があった。また、開催日を平日にすると放課後の時間帯しか設定できず、話し合いに十分な時間を確保できないという課題もある。今後は遠方の学校からも無理なく参加できるよう、Web会議システムの活用も検討していきたい。

B 病弱学級担当者の孤立

以前に比べて県内の病弱学級は増加傾向にあるとはいえ、その総数はまだまだ少なく、担当者が校内で孤軍奮闘している実態が再確認できた。平成30年度はネットワーク体制作りや情報提供を目的に情報交換会や事例検討会、公開研修を実施したが、内容や日程、企画に関する調整等の負担も課題となった。今後は実施方法を検討しながら、引き続き外部機関との橋渡し役を担っていきたいと考えているところである。

(2) 病院内訪問学級

ア 支援の流れ (対象児童生徒の入院)

